表７　ノーボッテン出身著名人

ノーベル文学賞作家	エービンド　ジョンソン
スウェーデン学士院常任秘書	ペーター　エングルンド教授
オリンピック金メダル　クロスカントリースキーヤー（2014）	シャーロッテ　カラ
世界チャンピオン金メダル　レスラー（2009）	ソフィア　マットソン
前アルペンスキーヤー	トーマス　フオグデ
アウグスト賞作家（2000）	ミカエル　ニイエミ

をとりだすことに強く依存している地域では、1980年代の恐怖は政治的一貫性や緊急性の感じの原因となりました。しかし今鉱業が黒字に戻って、よりよい地方企業開発政策への要請は、砕けさりました。危機が去ったということで党派的政策が戻ってきました。市政は単一産業に移り、産業は長い困難な期間のあと、非常に良くやっています。

これらの困難な時期には、失業者の多くがどこか他所へ移りました。イエリバレのような所では、人口の1/3を失いました。結果、風向きの変った時には、失業率の低下は、とても突然のように見えました。

お話で述べたように、イエリバレやキルーナ市は、鉱山業ブームの前に、完全に、あるいは部分的に土地を明け渡さなくてはなりません。転地は正に始まったところで、我々は建築ブームが鉱山ブームに力を借して、失業を減らすことになるのを見ることでしょう。しかし、最大の鉱山会社であるLKAB（ルオッサバーラ－キルナバーラ会社）は10年周期の計画を持っていて、新イエリバレや、新キルーナが新らしい〝1980年代〟にならない前に旨く完成するかどうか心配になります。そうはならないように祈ります。もしそうなっても、ノーボッテンが次の困難な時期にしっかり立ち向い、一つ以上の立脚点をもつことを希望します。

変化して、そして進路依存の絆をたちきることは出来るものでしょうか？　はい、私はそう信じます。この道にたちはだかる唯一の事柄は、我々自身が、それは不可能だと思ってしまうことではないでしょうか。

〈小樽市桂岡在住〉

2018年に向けて一緒に考えましょう

川 崎 一 彦

2018年はスウェーデンと日本の国交樹立150年の記念すべき節目を迎えます。

本稿では、このプロジェクトに関するこれまでの経緯を振り返り、2018年に向けてこれから両国で出来そうな可能性を探る参考になればと思います。

2018年の話題は、2013年２月21日に札幌で開催された在ストックホルムの渡邉芳樹・日本大使（当時）と在京のヴァリエ・スウェーデン大使の対談の場からスタートしました。http://bit.ly/13R1IFq

以下は対談における両大使のご発言の一部です。

- 2009年のフィンランド大公国建国200年に開催されたイベントなどは参考になる。（ヴァリエ）
- 1873（明治６）４月24～29日の岩倉使節団のスウェーデン訪問に改めて学ぶ必要がある。（渡邉、ヴァリエ）
- 具体的には、平和、相互の研究、創造性の育成、人間国宝など無形文化財、文学、人間の安全保障、高齢者ケア、インフラ、等の分野も検討の候補か。（ヴァリエ）
- 平和、自由、人権、民主主義など普遍的価値の普及にそれぞれの手法で取り組む相手の発見、先進諸国の中で実は失われてはいなかっ

た過去20年の日本経済、問題を問題として国民総がかりの議論で取り組む日本の対応力の強さ、世界のどの国も対応不能と見る超高齢社会、スウェーデンの2050年が既に現実となっている日本の驚異的対応力等の分野での、〈価値ある協働〉。（渡邉）

・1935年に王子製紙によりストックホルムの民族博物館の庭に寄贈された本格的な茶室「瑞暉亭（ずいきてい）」の改築など具体的な課題もある。（渡邉）

・両国の識者から意見を聞いてはどうか。（渡邉、ヴァリエ）

2013年５月11日にはヴァリエ大使をお迎えして札幌でワールド・カフェが開催されました。http://bit.ly/14sz0ea

私は５月末にスウェーデンに居を移しましたが、ストックホルムでも2018年に向けての意見交換会が８月からスタートしました。https://www.facebook.com/SwedenJapan2018

ストックホルム商科大学欧州日本研究所（所長：M. セーデルベリイ教授）の場所をお借りし、月一回のペースでミーティングを行っています。

毎回両国のさまざまな分野のゲストに2018年に向けての話題提供をして頂き、参加者で意見交換をする形態をとっています。

これまでに出た話題は以下のとおりです。

1st meeting (2013-8-15)

話題提供者　川崎一彦（東海大名誉教授）

創造性の育成に関する両国のコラボのニーズと可能性

2nd meeting (2013-9-17)

・ゲスト（via Skype）　西浦和樹（宮城学院女子大学教授）
スウェーデンから学ぶ幼児教育、アニメ制作など

・ツンマン武井典子（ヨーテボリ大学名誉教授）
文化交流と関連分野の書籍出版

3rd meeting (2013-10-30)

・ゲスト（via Skype）　伊藤伸哉（Aoyama TG セミナーファウンダー）
教育分野の交流

・ゲスト（via Skype）　難波美帆（北海道大学准教授）
大学発の社会のニーズ発掘のためのクリエイティブ対話

・映画〈happy〉の鑑賞とDr Kiwako Okuma-Nyströmによるコメント

4th meeting (2013-11-25)

・川野辺創（北海道大学国際本部副本部長）
北海道大学Modern Japanese Studies Program

・小牧遊（ストックホルム日本人会会長）
日本におけるストリンドベリ

・Lena Ryen（レクサンド市）
当別とレクサンドの姉妹都市交流――これまでとこれから

・Torbjörn Dalnäs（ジャーナリスト）
Swedes in old Japan and shipping relations

5th meeting (2014-1-21)

・三瓶恵子（K International）
Business relations between Japan and Sweden

・北大難波美帆先生らを交えて〈スウェーデン人の幸せと日本人の幸せ〉についての意見交換

6th meeting (2014-2-25)

・高見幸子（国際NGOナチュラルステップジャパン顧問）
森のムッレ教室の対日輸出

・鳥本範夫（日本折紙協会上級折紙師範）
おりがみワークショップ―小さな折紙で大きな発見

2013年11月に着任された森元誠二在ストックホルム日本大使は着任の挨拶で、以下のように述べておられます。http://www.se.emb-japan.go.jp/nihongo/embassy.htm

（写真はストックホルム商科大学におけるプロジェクト2018研究会の様子です）

日本とスウェーデンは、来る2018年に日瑞外交関係樹立150周年記念という二国間関係における節目の年を迎えます。政治経済、安全保障、文化、教育などあらゆる分野において両国関係全体を深めるべく、日本国大使として微力を尽くして参る決意です。

2018年プロジェクトの主眼はもちろん、2018年に向けて両国で何が出来るかを考え実践することにあります。両国の共通の関心は山とあります。

と同時に、両国民が一緒に考える絶好の機会でもあります。もちろん2018年に向けて出来ることと出来ないことがありますが、両国民が話し合いのプロセス自体をエンジョイ出来るし、話し合うこと自体に意味がある、と私は考えています。

2018年に向けて一緒に考え、話し合い、エンジョイしましょう。

〈本協会顧問、元常任理事・東海大学名誉教授〉

一般財団法人前田一歩園財団創立30周年記念事業に当協会が後援協力

墨 谷 和 則

平成25年10月４日は秋晴れであった。大型の貸し切りバスが札幌から道東の阿寒湖温泉を目指して快調に走っている。バスの中はこれから向かう阿寒湖温泉の森と湖、そしてマリモ、アイヌコタン、記念事業への参加等々への期待で溢れている。当協会の常任理事を務める生越さんが代表のホイスコーレ札幌の面々22名と俄か添乗員の筆者が乗り込んでの約５時間の旅である。足寄迄は高速道、そこからは一般道であるがあっという間に到着。平均年齢は決して低くはないが全員が疲れを見せない。

今回は単なる観光旅行ではない。財団の記念事業に賛同し応援するためにわざわざ札幌から駆けつけたのである。

記念事業の大きな目玉は二つある。一つは記念講演会「森と生活」、もう一つは教育専門家対象の「スウェーデンから学ぶアウトドア環境教育セミナー」である。当協会はこれらの事業に全面的に協力し成功に導いたのである。

まず５日に行われた記念講演会である。新設されたアイヌシアター「イコロ」を会場に「森と生活」と題して実施。最初に着物姿で登壇した作家の浜田久美子氏は、国内の林業の現状と取材で訪れたスウェーデンでの生活について触れ、「木が穏やかでいるには、手入れと適切な利用が必要」と述べ、暮らしの中での活用を訴えた。その結果財団の名前のように森の生活に一歩ずつ近づくと説いた。

次に札幌大学副学長の本田優子氏がアイヌ民族の世界観について語り、「樹木のカムイとアイヌ民族は互恵関係にある」と現代におけるアイヌ文化の重要性を強調した。同氏は平取の二風谷で萱野茂氏のもとで11年間暮らした経験があ